

解 題

岡山大学附属図書館鹿田分館に収蔵され、このたびこの目録に収録した古医書集成は、古い医学書を主体として、理学書、オランダ語医書その他の和書から成り、主として(I)岡山藩医学館これを引き継いだ岡山県病院、岡山県公立病院、岡山県医学校において購入し、使用された書籍、(II)倉敷の蘭方医妹尾又玄の旧蔵書、(III)美濃国の蘭方医田口鳳介の旧蔵書、(IV)都窪郡久米(現、総社市)の蘭方医山田成器の旧蔵書、(V)岡山市赤沢乾一の旧蔵書で構成されている。そのほか(VI)医学部眼科学教室及び小児科学教室には、それぞれの専門領域の古医書が収蔵されているが、明治末期及び大正期にその当時の教授によって購入あるいは寄贈されたものである。

I 岡山藩医学館旧蔵書

明治維新の動乱の終結後の明治元年(1868)12月、政府は医学教育に西欧医学を採用することに決め、その旨全国に布告した。岡山藩においてもこの新政府の方針に基づき明治3年4月、御野郡操山の麓(現、岡山市門田東山公園)の利光院跡に岡山藩医学館を、台崇寺跡に病院を開設した。そして同年6月にはオランダ陸軍二等軍医ロイトル(F. J. Ruijter, 1841~1886)を医学教師として招き、藩医らとともに医学生教育を開始した。ロイトルは解剖学・生理学・外科学・包帯学の講義を担当したようである。解剖学の講義の一部が印刷発刊された。これが『解剖記聞』である。

1 解剖記聞

巻1、巻2の木版本2冊で明治3年7月岡山藩医学館蔵版である。内容はいずれも骨学と靱帯学で、これ以外の講義録は出版されなかった。ロイトルがオランダ語で話した内容を、通訳の高橋鼎蔵(のち正直と改名、熊本藩医、1843~1921)が日本語に翻訳し、生徒に伝えたものである。しかしその他筋学・内臓学・外科学も講義された。当時医学館の二等教授であり、のち岡山県病院の初代病院長となった生田安宅旧蔵書(医学部医学資料室内)の中に、筋学・内臓学の講義ノートがある。



解剖記聞

2 その他の書籍

医学館旧蔵書には「岡山藩医学館文庫印」という朱印が押されており、次のとおりである。

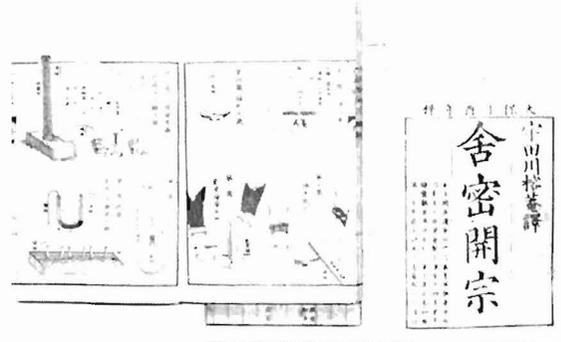
(1)『和蘭字彙』(2)『舎密局開講之説』(3)『舎密局必携前篇』(4)『理化新説』(5)『理化日記』(6)『袖珍薬説』(7)『化学訓蒙』(8)『化学入門』(9)『博物新編』(10)『全体新論』(11)『内科新説』(12)『婦嬰新説』(13)『西医略論』の13点138冊がある。そして朱印のあるオランダ語の医薬書その他が23点117冊、ドイツ語解剖学書1冊ほかがある。このうち(9)『博物新編』については蘭方医で教授であった石坂堅壮が会読を行なっている。

このうち『和蘭字彙』は徳川将軍の侍医桂川甫周(国興)編著で、長崎のオランダ商館長ゾーフ(1777~1835)

の蘭日辞書（通称長崎ハルマ）の改訂版で、前編は安政2年（1855）、後編は同5年に完成した。9冊本から20冊本までであるが、標準は13冊である。鹿田分館蔵のものは9冊本に属するもので、4冊だけ現存している。

3 舎密開宗

この本には「兵学館印」「学校典籍」「岡山県医学校典籍」などの朱印が次々と押されている。岡山藩は明治初年兵学館を創設し、英仏語学および士官術を教授した。のち兵学館が廃されて洋学所となったが、明治5年（1872）正月設立された普通学校に統合吸収された。同6年7月廃校となった。これを学校と称したようである。



舎密開宗内篇

この書は宇田川榕庵（1798～1846）の訳著で、内篇18巻、外篇3巻から成る。「舎密」はオランダ語 chemie（化学）の音訳で、開宗は物のおおもとを啓発するという意味である。英人 W. Henry が独訳し、さらにイペイ（A. Ijpeij）がオランダ語に訳した『Chemie voor Beginnende Liefhebbers』（1803年刊）が、その原本である。しかし単なる翻訳ではなく、多くのオランダ書を参考引用した著述である。内篇は天保8年（1837）に、外篇は弘化4年（1847）に刊行されたようである。西欧における科学として化学を初めてわが国に紹介したもので、この書により、物質を分子・原子のレベルで理解し、化合・酸化・還元などの概念を得ることが出来るようになり、榕庵は日本の化学の開祖として高く評価されている。

II 妹尾又玄旧蔵書

妹尾又玄（のち瀬尾と改名）（1829～1896）、諱は惟益、字は子謙、鳳蕉と号した。備中下道郡箭田村（現、古備郡真備町箭田）の医師是輔の長男、大阪の緒方洪庵の適塾に入門（嘉永3年＝1850）し、蘭学を学び、また三田藩蘭方医川本幸氏の門人録にも名を列ねている。のち帰郷し父のあとを継いだ。1857～1858年頃倉敷で開業し、種痘などで名医とうたわれた。死後養嗣子宗次郎（東大医学部別課卒、明治42年1月14日死去）が医業を継いだ。のち瀬尾家の蔵書は倉敷の素封家木山巖太郎の手に入った。一説にこの蔵書を預かった某氏が木山氏に売却したといわれている。木山氏は大正8年9月、当時の岡山医学専門学校に寄贈した。このうち和古医書は刊本73点511冊、写本5点17冊で、そのほか今回の目録に未収録の蘭書筆写本若干冊がある。その時代としては相当の蔵書家であり、これだけの医書を購入出来たのは医業も盛業であったことがうかがえる。この中の二、三の古医書について述べる。

1 質測窮理解臟図賦

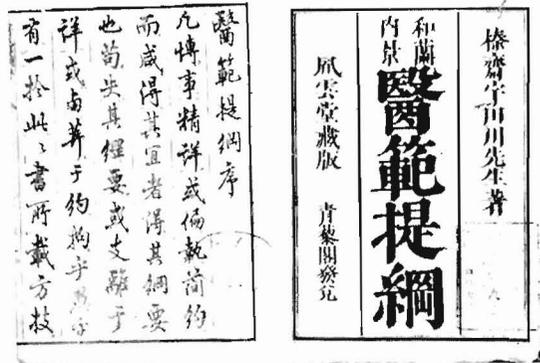
朝廷の典薬寮医師で蘭方医の小森桃塙（1782～1843）が文政4年（1821）12月16日、京都西刑場で男の刑屍を解剖した。従事者73名、参観者は同門が11名、他門49名で、この解剖記録を桃塙の門人池田冬蔵（越前藩福井）が編集して翌年刊行したのがこの本である。本文35葉、図98と多く、色刷りであるのが珍しく、この中に乳糜管を示す図が2つあり、わが国で最初の乳糜管の実視であった。参観者の中には藤林普山や伊藤圭介らの著名な蘭学者がいた。

2 重訂解体新書

杉田玄白の門人大槻玄沢（1757～1827、一ノ関藩医、のち仙台藩医）が師玄白の命を受けて、玄白らの訳した『解体新書』を改訂したものである。序・附言等の1冊、本文4巻4冊、名義解6巻6冊、附録2巻2冊の計12巻13冊と、南小柁寧一画、中伊三郎の銅版解剖図とから成っているが、鹿田分館本はこの解剖図を欠いている。しかし幸いに、中央館の池田家文庫の中にこの解剖図が収蔵されている。名義解及び附録には、玄沢が西洋医書を参考にして得た知識が記されている。全文漢文で次の『西説医範提綱釈義』に比べ難解である。

3 西説医範提綱釈義

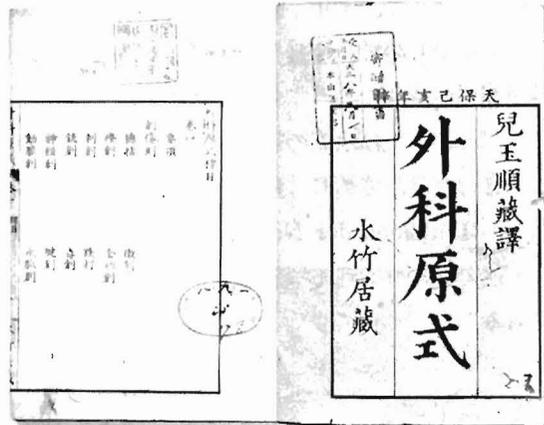
津山藩医宇田川玄真（号は榛斎、1764～1834）著。諸種のオランダ語の解剖書を翻訳集成し「遠西医範」（30巻）と名づけた。これを基にして玄真が門人に講義したものを門人諏訪士徳（又の名を藤井方亭）が『西説医範提綱釈義』（通称『医範提綱』）3巻として文化2年（1805）に出版した。次いで文化5年（1808）、亜欧堂永田田善の刻したわが国最初の銅版解剖図1冊を刊行した（本目録ではこの図を欠いているが、幸い本学医学部医学資料室に寄託されている生田安宅旧蔵書の中にある）。『解体新書』や『重訂解体新書』が漢文で難解なの 비해、この書の本文は平易な延べ書き文が主であり、解剖学を主体として生理学から病理学に至るまで簡明に述べられている。特記すべきことは、腺・腺・乳糜管などの新しい漢字を造って用いていることである。



西説医範提綱釈義

4 外科原式

備前藩家老伊木氏の侍医児玉順蔵（1805～1861）が訳述し、天保11年（1840）に出版したものであるが、原書のオランダ外科書は分からない。順蔵は脱藩し長崎でオランダ商館医師シーボルトに師事し、蘭方医学を学ぶ。天保5年（1834）帰参を許されて岡山に帰り、主家の御用を勤めるかたわら、オランダ語の教授、医書の訳述に専念した。その最初の訳業がこの『外科原式』であった。第一巻は各種外傷、第二巻は瘡、瘍、癭について述べている。続いて第三巻腫瘍、第四巻脱墜、第五巻奇態、第六巻骨病、第七巻手術で完結すべきものであったと思われるが、未刊で終わった。なお第一巻は三好春伯、第二巻は辻尚彦が校本に当たっているが、いずれも備前藩医で、順蔵に蘭方医学・オランダ語を習った門人であろう。



外科原式

5 扶氏經驗遺訓

扶氏とはドイツのベルリン大学内科教授フーフェランド(Christoph Wilhelm Hufeland, 1764～1836)

で、彼の著『Enchiridion Medicum (医学必携)』の第2版(1836年刊)のオランダ語訳本(H. H. Hageman, Jr. 訳, 1838年刊)を、緒方洪庵とその義弟緒方郁蔵(旧姓大戸, 備中後月郡築瀬生まれ)が翻訳し、安政5~文久元年(1858~1861)にわたり刊行されたものである。訳稿は天保13年(1842)に一応完成していたが、漢方系の幕府医学館の干渉により出版出来なかった。しかし蘭方解禁により出版可能となり、当時江戸にいた門人箕作秋坪の助力によって出版出来ることになった。この書はフーフェ

ランドが50年の経験をもとにして書いた内科書である。この訳書は洪庵の代表的著作で、蘭学者としての高名な洪庵の名声と共に広く流布した。この本の版木の一部は、洪庵の末孫より東大附属図書館に寄贈されて現存している。

なお、洪庵の著訳書として以下の『人身究理小解』のほか、日本最初の病理学書『病学通論』2巻、嘉永2年(1849)刊(妹尾本)及び安政5年(1858)のコレラ流行時に急遽出版した『虎狼痢治準』1巻(田口本)がある。

6 人身究理小解

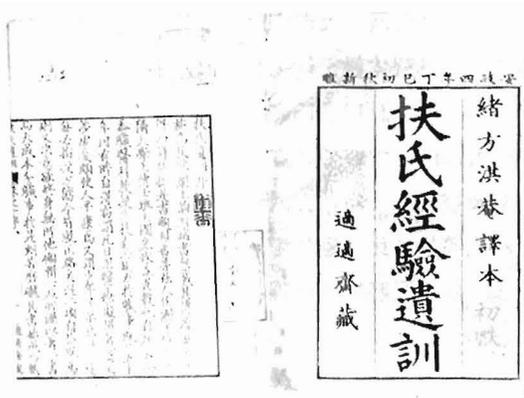
ドイツのローゼ(T. G. A. Roose)著のドイツ語本の人体生理学書を、エイプマ(M. S. Ypma)がオランダ語に訳して『Handboek der Natuurkunde van den Mensch』と名づけて1809年に出版したものを、緒方洪庵が天保3年(1832)12月に訳し終わったものである。これは洪庵が江戸の坪井信道の蘭学塾日習堂に入門して、1年半余りしかたっていない23歳の訳である。このことは彼の語学力が非凡であったことを示すもので、今日多くの写本が残されていることは、当時多くの医学生に読まれ流布したことを物語っている。この写本では、洪庵が訳すことが不能であった文をそのまま原文のオランダ語で記しており、このことは洪庵の訳本の原本に近いことを示唆している。また末尾に嘉永6年(1853)と写本終了の日付が示してあり、最も古い写本の類に入る。

7 Handboek der Natuurkunde van den Mensch.

上述の『人身究理小解』のオランダ語本である。2つに折った日本紙に印刷し、和本と同様の糸綴じであるので、日本で複製されたものである。長崎の出島で印刷されたものでなかろうか。ちなみに、長崎の出島の印刷所でオランダの医書を印刷発行したのは文久2年(1862)であった。

8 内服同功

〔初編〕は山田貞順(備中足守藩医, 適塾門人, ?~1905)輯で、二編は杉生方策(備中時田藩医, 三須村在住, 1831~1892)輯である。二人はいずれも倉敷の蘭方医石坂堅壯(空洞, 1814~1899)の門人で、師塾で実用して有効な治療法や医療器具などを、諸医書を参考にして編集したものである。書名は堅壯の命名したもので、内服療法と同じ効用があるという意味である。この本は杉生方策が在塾中計画していたが、病のため塾を去ったので、山田貞順が引き継いで〔初編〕を安政5年(1858)刊行し、次に貞順が足守に帰ったが、藩務多忙のため、方策が引き継いで二編を編集し、安政6年(1859)に出版



扶氏經驗遺訓

した。〔初編〕の重版には緒方洪庵の序があり、薫腸法、灌腸法、刺絡蟻針角法、エレキテル法などが述べられ、薫腸器、圧絡帯（止血バンド）、エレキテル内景図の附図が載せてある。二編の主要題目は〔初編〕と同じであるが、内容は更に詳しく、「エレキテル」に変えて「ガルバニスム」とし、詳しく電気発生機の製作法を図示している。また珍しいことは、杉田成卿訳述の『済生備考』（嘉永3年=1850刊）を見て、師塾で作製し用いていた聴管（聴診器）の図を載せている。なおこの外、臂鉤（抜歯器）や潤窄器の図を載せているが、止血バンドと共に、これら3点は山田成器旧蔵書と共に寄贈された医療具の中にあり、本学医学資料室に展示してある。なおこの本は旧田口本の中にもある。

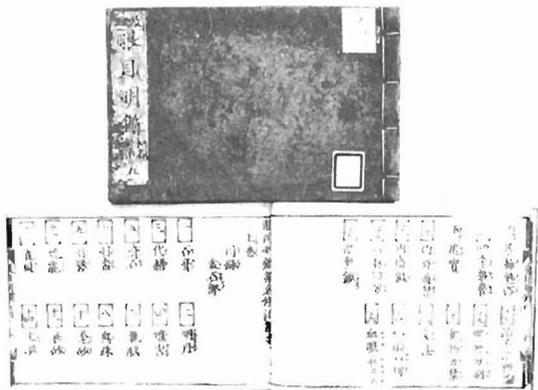
III 美濃田口氏旧蔵書

この田口本は大正12年2月から同13年1月までの一年間岡山医科大学法医学教授として在任し、次いで、京都帝大に転任した小南又一郎（1883~1954）が、同年6月寄贈したものである。この田口本には「美濃田口養圭之信」、「田口氏之記」の朱印が押されており、中には、「Tagti Fooske te Mino」の朱印もある。筆写本の中に田口玄僊、玄仙、養圭、鳳介などの名が散見する。筆者は田口鳳介の名を大垣藩の著名な蘭方医江馬活堂（4代目春齡）の格物堂門人録の中に見つけることが出来た。この門人録に「美濃国恵那郡付知村 田口鳳介後改養圭、安政乙卯（2年、1855）五月」と記されている。小南氏の出生地は岐阜県恵那郡付知町で、田口氏と同じであることが分かった。田口家と小南家との関係は不明である。上述のように鳳介は後に養圭と改めているが、玄仙（玄僊）— 養圭之信 — 鳳介重明と継承されているようである。

この田口本は古医書・薬剂書340点913冊（うち写本212冊）、本草書5点22冊（うち写本7冊）である。書物は漢方系と蘭方系及び明治期の医書に大別できるが、田口家は代々漢方医であり、養圭之信は尾張藩医浅井貞庵の静観堂及び同藩医河田華山の塾で漢方を学んでいる。この養圭の子と考えられる鳳介は、江馬格物堂に入門する前には、尾張の蘭方医で本草学者の伊藤圭介（シーボルトの門人）の塾に入り牛痘書や内科訳書などを写本している（1853年頃）。また代々眼科を得意としたようで、わが国における眼科書の刊行本の最初である『眼目明鑑』（宝永4年=1707）をはじめ、数十冊の眼科の刊本・写本がある。養圭は日本における眼科専門医の元祖尾張国海東郡の馬島明眼院に入門して学んだようで、中国の眼科書『審視瑤函』を文政8年（1825）に写本し、馬嶋養圭と署名がしてある。なお「浅井先生方策講記」、「金匱要略講談」（貞庵先生辨）、「河田華山先生傷寒論口義」などの筆写本は、漢方の医学生がどのような講義を受けていたかを知るうえに、貴重な興味あるノートである。



聴管（内服同功より）



眼目明鑑

その他興味あるものとして写本「西説医範」(6冊)がある。第1冊は中腔・心血脈・胎児血脈, 第2冊は頭腔脈部(注:脈は神経の新造字), 第3冊は頭腔, 第4冊は鼻・口・舌, 第5冊は気管, 第6冊は皮・毛・爪・膜・鼻・脛(注:腺は前述のように宇田川玄真の新造字であるが, この腺に相当する新造字)。この写本は前述の『医範提綱』の基になった「遠西医範」(自筆本)の一部と考えられ, 第6冊の題目に「遠西医範鼻篇」と書かれている。そして蘭方医稲村三伯(鳥取藩医, 大槻玄沢の門人, のち海上随鸥と変名)の「八譜」系の新造漢字を随所に使っており, また欄外に天然按(おそらく野呂天然)の記入があり, 野呂天然にも彼独特の新造字を使って出版した解剖書『生象約言』がある。

なお眼科学教室旧蔵の「遠西医範眼目篇訳図譜校訂 宇田川玄真訳」はまさに遠西医範の一部である。東京大学総合図書館蔵の「遠西医範口篇・脳篇」(自筆本)や, 東北大学狩野文庫の「遠西医範肺篇・膜篇」(自筆本)と対比して研究することが重要と考えられる。

IV 山田成器旧蔵書

蘭方医山田成器(1831~1912)は備中都窪郡久米(現, 総社市)の生まれ。倉敷の石坂典礼, 同郡三須村(現, 総社市)の杉生革斎に医術を学び, 嘉永元年(1848)長崎に遊学し, 蘭方医阿部魯庵に師事し, オランダ医学を学んだ。翌年帰国, このとき牛痘苗を持って帰り, 村民に施したといわれている。嘉永4年(1851)京都の蘭方医新宮涼庭の順正書院に入門, 内科・産科を修練し, 安政元年(1854)7月帰郷し, 再び医業を開いた。若くして母, 次いで父を失い, 学資が乏しかったため, 刊本の購入は出来ず, 専ら写本をしたようである。子孫の山田鞆負から昭和46年7月, この旧蔵書が寄贈されたが, 写本が大部分である。なおこれら占医書のほか, 長崎から持ち帰ったと考えられる種痘用ラッセットのほか, 止血バンド, 弾丸抜き器, 抜歯器や, そのほか明治初期の金属製注射器などの珍しい医療器具が寄贈され, 現在医学資料室に展示されている。

1. 蒲爾花歌万病治準

坪井信道(1795~1848)は緒方洪庵・箕作阮甫や川本幸民らの著名な蘭学者の門弟を育てたことでもあまりにも有名である。彼がライデン大学教授ブールハーベ(H. Boerhaave, 1668~1738)の代表の一つAphorismi(箴言)(1709年)に弟子のG. van Swietenが註を施した本を蘭訳した『Verklaaring der Korte Stellingen van Herman Boerhaave』(1760~1763)を文政6年(1823)から同9年にわたって翻訳したものである。原著者のブールハーベ(蒲爾花歌)はライデン大学の植物学・臨床医学・化学の教授で, 学長を勤めたライデン学統の総師であり, 当時「全欧州の師表」と仰がれた。この学統は全世界にまたがり, 日本の蘭学期にも, アメリカ医学の創始期にも, その影響を与えている。

「万病治準」の中で信道は「自然」Natuurの訳に困り, はじめは那去児(Natuur)と原語そのままを標音して表わし, のちに仏教語の「本然」とし, 辛うじて「自然」にたどりついている。また信道が苦心したのは, 物質観の単位となる微粒子の訳し方で, これを「元質」もしくは「元実」と訳している。ブールハーベは顕微鏡下に可視物の最小単位である繊維を発見し, すべての固体は「繊維」Fibreからなるとした。ブールハーベはまたベッドサイド・ティーチング(実地臨床医学教育)の創始者として, また植物学者リンネもその門弟であることでもその名が高い。

坪井信道は多くの著訳書を残しているが, 刊本は一冊もなく, この「万病治準」が最も大部の訳書である。おそらくこれは新宮涼庭の順正書院で写本されたと考えられるが, 涼庭にもブールハーベの著書

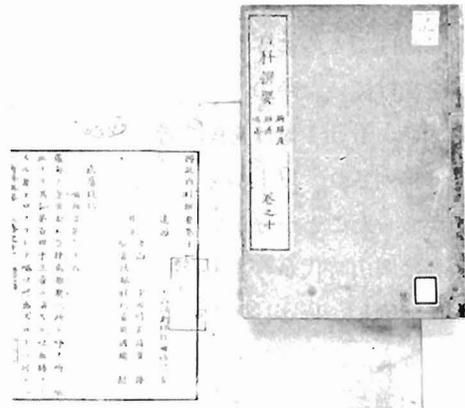
『Institutiones Medicae』（1708、医学研究—医学論）の蘭訳本の一部の訳「血論」や「生理則」があり、涼庭もまたライデン学統の思想を受けた蘭学者の一人であり、坪井信道の「万病治準」を持っていたことは興味深いことである。

V 赤沢乾一旧蔵書

故赤沢乾一の長女喜久さんから、親戚の山崎三省鳥取大学名誉教授（岡山医大昭和6年卒）を介して昭和55年11月寄贈されたものである。赤沢（1873～1962）は広島県神石郡三和町の生まれ。明治28年（1895）第三高等学校医学部を卒業、岡山県病院に勤めたのち岡山市で開業、岡山市医師会長、岡山県医師会副会長、岡山博愛会理事、関西中学と山陽高女の財団理事、就実高女財団理事を歴任した。和歌を楽しみ、歌集『赤沢乾一大人遺詠集』がある。昭和37年7月3日死去。

① 西説内科撰要

津山藩医宇田川玄随（1755～1797）が、オランダの医師ゴルテル（Johannes de Gorter）の内科書『Gezuiverde Geneesekunst, of Korte Onderwijs der meeste inwendige Ziekten（内科諸病簡明治療書）』（1744刊）を訳して、寛政4年（1792）に刊行したもので、日本における最初の西洋内科翻訳書である。この医書によって多くの医師を啓蒙し、西洋内科を専攻するものが輩出した。



西説内科撰要

VI 眼科学教室旧蔵書

この眼科旧蔵書はすべて眼科で、その多くは江戸の眼科医土生玄碩の迎翠堂塾で写本されたものである。その二、三について述べる。

1 遠西医範眼目篇訳図譜校訂

前述のように宇田川玄真著『医範提綱』のもととなった稿本「遠西医範」の一部で、眼球の解剖は勿論、網膜への映像の理論にも言及し、更に白内障の病理、手術法なども述べている。そして巻末に掲載すべき図を、クルムス、ブランカールツ、ヘルヘイン、バルヘインの各解剖書の図から採用することとし、図は掲載しなかったが、図の説明を和文で記している。

2 視力乏弱病論

洪庵の修業時代の作らしく、出来た年代は分からない。イギリスのジョン・スティブンスンの書をオランダのライスセンが訳して註を加えたもので、1816年刊の第2版を緒方洪庵が訳したものである。網膜の感覚の過敏によって視力の減弱する病気の症状・原因・類症鑑別・療法について述べている。洪庵の眼に関する短い著作として「視学升堂」という、レンズの光学の簡単な説明と、眼の作用を解説したものがあ

3 眼科一家言

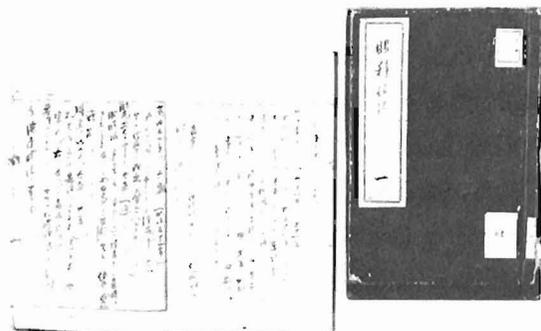
安田玉海（1818～1843）は備中酒津（現、倉敷市）の生まれ。医師であった父孝節とともに肥後天草の眼科医上田公鼎の弟子となり、假瞼孔術（白内障の手術）を学び、帰国して同所で開業した。天保11年（1840）、師公鼎は酒津に来遊し、同年6月死去した。玉海は師より学んだ假瞼孔術を、『眼科一家言』

の中で世で紹介した。当時このような優れた手術を行なったことは高く評価されている（小川剣三郎著『日本眼科学稿史』）。

4 眼科瑣談

井上通泰（1866～1941）は東大医学部を卒業後、兵庫県立姫路病院副院長・眼科医長となり、明治28年（1895）7月、第三高等学校医学部眼科教授に就任し、岡山県病院眼科医長を兼ね、明治34年（1901）引き続き岡山医学専門学校教授であったが翌35年辞職、東京で井上眼科病院を開業した。

この通泰の自筆本は毛筆で書かれ、第1～3巻の3冊は、姫路病院在職中の明治27年12月9日から明治31年7月3日まで執筆したもので、眼病やその治療法及び自ら経験した臨床例や岡山県病院眼科患者の統計などが詳細に記述され、筆写し終わった年月が記され、筆者の几帳面な性格がうかがえる。当時岡山県病院でどのような患者が、どのような病気で治療を受けていたかの詳細なことがうかがい知れて興味深い。もう1冊は記述内容の目録で、アイウエオ順に排列され、以上の4冊以外に第4、5、6、7巻があったことが分かる。



眼科瑣談

通泰は岡山時代から和歌を良くし、香川景樹の桂園派に傾倒し、しばしば歌会を催した。のち宮内省御歌所寄人、宮中顧問官、帝国芸術院会員、貴族院議員に勅選され、医師としては特異な道を歩んだ。昭和16年8月15日東京で死去した。

（医学部教授 中山 沃）